ISSN 1349-385X

名古屋大学 大学文書資料室ニュース

NUA Nagoya University Archives

Nagoya University Archives News　第22号　2007. 3

目次 Contents

大学のミッションと大学文書資料室（理事・副総長　大峯 巖）―― 2
法人文書の評価選別作業をはじめました―― 3
全学教養科目「情報公開と文書資料」を開講しています―― 4
資料室だより①
キタン会（経済学部同窓会）の旧蔵資料を公開しました―― 5
資料室だより②
新しい検索システムを導入しました―― 6
資料室日誌（抄）―― 7
第２回ホームカミングデイで「豊田講堂のあゆみ　特別展」をおこないました ―― 8

豊田講堂の石膏模型（１／200スケール）。豊田講堂が完成した1960年に、施工業者の竹中工務店が製作した。
第２回ホームカミングデイでも展示された（裏表紙参照）。

大学のミッションと大学文書資料室

名古屋大学理事・副総長　大峯　　巖

国立大学が法人化、即ち国の保護・監督下を離れ、３年が経過しようとしている。これを例えれば、大学という船が陸を離れるのに大きなエネルギーを要し、ようやく岸を離れ、ゆっくりと海原へ旅立ちを始めた所である。多くの乗組員は懐かしい陸への思いを断ちきれず、また未知の海原への不安を抱えている。

しかし一方、未知の旅ほど、面白いものはない。航海の方向は自由であり、新しい大陸を見つけられるかも知れない。と、同時に嵐や座礁など多くの危険もある、チャレンジングな旅である。この広い海を行くには、心に羅針盤が必要である。そして方向を定め進んでいく。羅針盤となるものは、大学の根幹である「真理を知ろうとする意志」であろう。しかし、真理とは、無限のあこがれと熱情、そして幾多の挫折を経てのみ垣間見ることのできるものであり、簡単に得られるものでない。この旅は決して易しくないと思われる。

人の力は有限であり、我々は、同時に多くのことを成しえない。現在のような大きな変化の中では、「大切なもの」を幾つか選び、まず、それらを守り育てることが肝心だと思う。大学は学術の場である。必死に学ぶことに依って、何かをつかもうとする、そのような「学をする者の姿」を通して、若い人が育つ、それが大学の教育である。「学」は、学ぶ者がその対象としているものに同化することによって初めて見えてくるもの、即ち、自然の持つ大きさに入り込み、我と我を取り巻くもの・生きるものへの共感を得ていく過程である。

“科学技術”と言うものが短期的な結果を求められる中にあって、我々はこのような本来の「学」の姿をしっかり捉えなければならない。現在の混迷の中にあって、学問は「我々の原点（座標の原点）を教えてくれるもの」であるから。

名古屋大学の歴史は決して長くない、再来年（2009年）に70年を迎えようとしている。しかしこの間にも、世の中は大きく変化してきた。大学文書資料室は、我々の先輩が如何に考え、大学の学問を築き上げてきたかを示してくれる場所である。大学の歴史を知ることは、大学の姿・ミッション（使命）をさらに昇華させることが求められている現在、真の支えとなるものである。学問は、先人、我々、そして継ぎ行く人々の連綿たる行為により作りだされていくものである。

名城キャンパス時代の史料をお寄せください

大学文書資料室では、2000（平成12）年から「名大史ブックレット」シリーズを刊行しています。『名古屋大学五十年史』の記述をもとに新たな研究成果を加え、写真や図も多く用いて、50ページ程度に分かりやすくまとめられています。これまで12巻を刊行してきました。

現在、何巻かを割いて、各学部の誕生の経緯と草創期の歴史をまとめようと考えています。すでに昨年３月にはその第１弾として、『農学部の誕生と安城キャンパス―学部の誕生と草創期①―』を上梓しました。次の第２弾以降では、名城キャンパスとその当時の学部をテーマとする巻を刊行する予定です。

つきましては、文書、図書、印刷物、写真、映像、物品類、何でもかまいませんので、名城キャンパスやその時代の学部（文学部、法学部、教育学部）の歴史（学生生活も含みます）に関係する史料の情報をお持ちでしたら、ぜひ資料室までご一報ください。

法人文書の評価選別作業をはじめました

大学文書資料室では、昨年11月から、法人文書の評価選別作業をはじめました。

大学文書資料室（以下、資料室）は、2004（平成16年）年度の改組の際、学内の事務組織で使われなくなった法人文書を評価選別し、重要なものは永久的に保存・整理して公開する、それまでの名大にはなかった新しい業務を担うことになりました。中期計画の６年間において、その業務が円滑に行われる体制を整えることがうたわれ、事務組織の理解と協力を得ながら、資料室が中心となってこの仕事を進めています。

そもそも、どうしてこうした業務が必要なのでしょうか。欧米諸国では、とりわけ公的性格の強い組織にはアーキビストが置かれ、その監督指揮の下で記録の評価選別を行なうことが普通に行なわれています。また、評価選別された記録史料を保存・公開する施設である文書館（アーカイブズ）は、欧米諸国では図書館・博物館とならぶ文化施設として普及しています。

日本におけるアーカイブズ科学（記録史料学）の第一人者である安藤正人氏（現在、国文学研究資料館アーカイブズ研究系教授）は、文書館を設置する目的を大きく三つにまとめています。それは、①文化遺産の保存、②市民の権利の保障、③行政あるいは経営の効率化・高度化です。

①は、未来の社会のために、自らの組織が生み出した歴史的文化的価値の高い記録を確実に残すということです。②は、民主主義社会の存立条件である市民の「知る権利」を保障し、社会へのアカウンタビリティ（説明責任）を果たすことです。③は、その組織の権利および過去の成功や失敗を、すぐに必要な情報が取り出せる形で保存し、各種運営のための活用に備えることです。

いずれも、自由で民主的な社会を維持するのに必要不可欠なものでありながら、日本では重視されて来ず、近代文書館が発祥した欧米の諸国だけではなく、今やアジア諸国にも大きく遅れをとっています。

史料学や歴史学の素養、さらには所属する機関の歴史や業務に対する知識など、専門的な技能が求められるアーキビストは、諸外国では養成制度も整備されています。日本では、この養成制度も確立されていません。

名古屋大学は、法人化したとはいえ、日本の国立基幹大学の一つであることに変わりはなく、ひいては世界レベルの知の拠点となるべき機関です。③はむろんのこと、①、②の責務を十分に果たすことが求められるのは当然のことであり、それが本学に資料室が設置されたゆえんでもあります。また資料室は、名大の歴史資料館でもありますが、現在の法人文書が歴史資料として確実に残される筋道がなければ、やがてはその機能も果たせなくなるでしょう。

これまで資料室は、３年間にわたって総長裁量経費を配分され、名大の記録を作成された時点から歴史資料として公開されるまで一貫して管理する「シームレス型記録管理システム」を開発してきました。これによって、名大の記録管理を改善するとともに、資料室が直接目を通す記録を大幅に減らすことができます。ただその前段階として、形式やファイル名のみで判断ができる記録については、各部局に評価選別を委ねられるような基準を作ることも必要になります。

今回開始した評価選別作業は、豊田講堂の改修工事にともない、その地階倉庫の法人文書を避難する際、大量の使われなくなった文書（非現用文書）もそこに保存されていることが分かり、これを処分するためのものです。ただ同時に、これを利用して、各部局にお願いする評価選別の基準を作るための試験的作業でもあります。

現在、第６実験棟には、本部の非現用文書が入った350箱ものダンボールが山積みになっています。これを今年中には評価選別し、基準案を作成する予定です。

評価選別室（第６実験棟工作室）

全学教養科目「情報公開と文書資料―文書の世界を歩く―」を開講しています

大学文書資料室では、全学教育科目における全学教養科目として、これまで本ニュースでも紹介してきた「名大の歴史をたどる」のほかに、「情報公開と文書資料―文書の世界を歩く―」を開講しています（第Ⅳ期対象）。

この講義は題目にもあるように、「文書」という存在について考える講義ですが、その文書が作成・使用されている段階（現用文書）と、それが使用されなくなって後世に残される段階（記録史料＝アーカイブズ）を一貫して取り扱っている点に大きな特色があります。文書を、その一生（ライフサイクル）を通じて考えようというわけです。

現用文書については、その整理方法（ファイリングリテラシー）の基礎とともに、これといわゆる情報公開法の関係、情報開示請求の方法なども解説するなど、最新の状況を反映した内容になっています。受講生の情報公開法への関心は、学部を問わず概して高く、本講義は単なる教養ではなく、一般社会で必要な知識を得る場としても位置づけられるでしょう。

記録史料については、古文書学や史料学などの成果を分かりやすく解説すると同時に、新しい学問領域である記録史料学（アーカイブズ学）の概要を紹介しています。

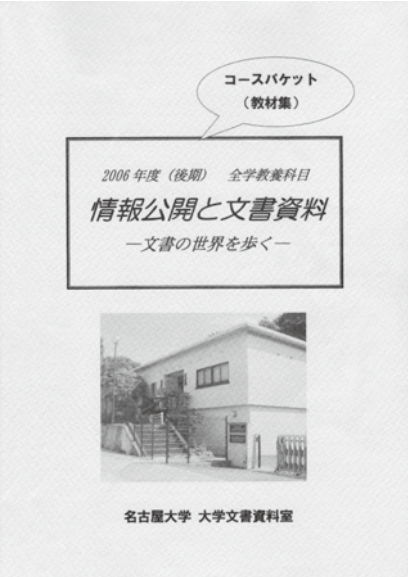
諸外国では、民主主義を担保し、後世に歴史的文化的遺産を遺す機能を持つ重要な施設として定着している文書館ですが、日本ではその普及がきわめて遅れています。こうした文書館の意義を説明し、その利用方法を紹介することが、本講義の最も重要な目標の一つです。受講するまでは、文書館の存在すら知らなかった学生も多く、講義を通じ全く新しい知的刺激を得ることができたと、受講生から好評を得ています。

講義は、大学文書資料室長の羽賀祥二教授が開講し、２人の室員がその専門領域に応じてこれをサポートする形で進められます。全15回が、相互に密接に関係しながらも、基本的に１回完結のオムニバス方式になっており、そのうちの何回かは学内外の講師に担当していただいています。今年度は、学内では、情報公開法については法学研究科の紙野健二教授、博物館のあり方について博物館の足立守教授、古文書学について附属図書館の秋山晶則助教授にお願いしました。また学外からは、国文学研究資料館アーカイブズ研究系の高橋実教授、愛知県公文書館の原邦夫副館長を招聘しました。

また、大学文書資料室と広報プラザ、すなわち名大における文書館と情報公開窓口を実地に見学する回や、附属図書館に所蔵されている著名な古文書である高木家文書を、実際に閲覧する回をもうけることもしています。講義で解説したことを実地に体験できる企画として、これらも学生に評判です。

さらにこの講義では、大学文書資料室がコースパケット（教材集）を編集・発行し、受講生全員に配付しています（写真）。これは各回で共通して用いる基礎的な資料を90ページ程度の小冊子にまとめたもので、受講生には毎回持参させて利用しています。これは、多くの講師が担っている本講義の効率化に資するとともに、受講生の予復習の便宜にもなっています。

多様な講師と内容をそなえ、最新の研究状況と実地の体験を組み合わせた本講義は、2002（平成14）年度の開始以来、受講生の高い評価を得ています。当初は50名に満たなかった受講者も年々増えつづけ、今年度は100名近くになりました。来年度も、さらに内容を改善して開講する予定です。



コースパケットの表紙

資料室だより①

○キタン会（経済学部同窓会）の旧蔵資料を公開しました

このたび大学文書資料室では、社団法人キタン会（名古屋大学経済学部同窓会）が所蔵していた資料の寄贈を受け、これを一般公開しました。

このキタン会資料は、一昨年の末にキタン会が事務所を経済学部内に移転する際に、名古屋大学が寄贈を受けた約1,000点を数える同会事務所所蔵資料です。移転前に資料室が旧事務所を訪問し、名大史に関係の深い資料を中心にピックアップし、まず一時的に資料室で保管することになりました。その後、資料室が目録を作成したうえで附属図書館や経済学研究科と協議し、図書の一部を経済学研究科附属図書館の蔵書としたほかは、資料室の所蔵資料として保存することになりました。

この資料群には、日本でも有数の学部同窓会であるキタン会や、卒業年別の同窓会などの団体の活動を記した貴重な記録（会誌、アルバムなど）をはじめ、教員や卒業生の回顧録や著書も多く含まれ、中には経済学部の前身にあたる名古屋高等商業学校時代の資料もあります（右の写真はその一部です）。経済学部を中心に、名大と社会の関係を考えるうえで、大変貴重な歴史資料となることでしょう。

冊子体の目録は刊行しておりませんが、次ページで紹介する新しいオンライン検索システムによって、目録データを見ることができます。資料室にご来室のうえ、希望する資料を記入した申請書をご提出いただければ、どなたでも閲覧することができます。

資料室の書庫に配架されたキタン会寄贈資料

名古屋高等商業学校の戦前の卒業記念アルバム

どれも分厚く装丁も豪華

資料室だより②

○新しい検索システムを導入しました

このたび大学文書資料室では、将来構想を視野に入れながら新しいオンライン検索システムを導入し、所蔵資料の検索の便を高めました。

これまで資料室では、『保存資料目録』を毎年刊行し、これに原則として全ての公開資料を掲載していました。オンライン検索システムは、この目録データを市販のソフト（ファイルメーカープロ）に転用する形で運用しており、どちらかといえば副次的な位置づけでした。

しかしこれからの資料検索は、こうしたデジタル技術による検索システムが主流になっていくものと考えられます。また資料室では、総長裁量経費を受けて、名古屋大学の法人文書管理を促進する「シームレス型記録管理システム」を開発し、近年中の導入を構想していますが、このデータは法人文書が記録史料として資料室に所蔵される際にも、検索用に転用されることになります。こうした状況に対応するには、市販のソフトでは限界があることから、資料室の業務に即したシステムを業者に発注しました。また、情報のセキュリティに万全を期するため、外部公開用と内部処理用にサーバーを分けることにしました。

もちろん、資料室の都合だけではなく、利用者の使い勝手にもさまざまな配慮をしてあります。下の画面図のように、入力事項２つにプルダウンメニュー１つと、インターフェイスはきわめてシンプルですが、自由度が高く、かつきめの細かい検索ができるようになっています。またプルダウンメニューは、目録の分類項目に対応しており、しかも検索でヒットした目録データはCSV ファイルとしてダウンロードでき、デジタル的に従来の冊子目録を再現することも可能です。これからも冊子目録は刊行していきますが、それは全公開資料を対象とするものではなく、重要な資料群（今年度は初代総長渋沢元治関係資料）を選んでのものになります。これからは、受け入れた資料のうち、可能なものはすぐにでも公開できるようになるでしょう。

現時点では、新システムで検索できるのは昨年の11月以降に受け入れた資料のみですが、旧データも順次運用できるようにしていく予定です。

検索システムのメイン画面図

資料室日誌（抄）

８月２日　財務課と刊行物の有償化について打合せ。
８月３日　『名古屋大学大学文書資料室紀要』15号の原稿募集。
８月７日　岩田好一朗名誉教授より資料を受贈。
８月23日　中日新聞社会部へ、伊藤圭介についての資料を提供。
８月24日　学内各部局（東山地区）の法人文書保管状況調査を実施。
８月25日　理学研究科高木新助教授より資料を受贈。
８月31日　横山和弘事務補佐員が退職。
９月１日　学内各部局（東山地区）の法人文書保管状況調査を実施。
９月13日　学内各部局（東山地区）の法人文書保管状況調査を実施。
全国大学史資料協議会東日本部会メールマガジンに『名古屋大学大学文書資料室紀要』の原稿募集掲載。
９月21日　学内各部局（鶴舞・大幸地区）の法人文書保管状況調査を実施。
９月23日　山口拓史室員と堀田慎一郎室員が、科研費による研究会に共同研究者として出席（於東北大学、～24日）。
９月27日　青木忠夫氏来室、名古屋高等商業学校卒業生関係資料の復刻刊行について打合せ。
９月30日　第２回ホームカミングデイのメイン会場にて、企画展示「名古屋大学のあゆみ―キャンパスの変遷―」と特別展示「豊田講堂のあゆみ」を実施。
『名古屋大学大学文書資料室ニュース』第21号を刊行。
10月２日　全学教養科目「情報公開と文書資料―文書の世界を歩く―」の講義開始。
小田嶋徹専門職員が着任（10月１日付）。
ヨット部 OB 大橋郁夫氏より資料を受贈。
10月３日　堀田室員が核融合アーカイブズ共同研究全体会議にて共同研究者として出席、「名古屋大学における文書記録管理の構想」を報告（於核融合科学研究所）。
10月５日　アジア歴史資料センターの委託調査員が来室。
李主先事務補佐員が着任（10月１日付）。
10月６日　明治大学史資料センターから資料室の視察・調査のため来室。
10月10日　豊田講堂改修工事のため、名大キャンパス模型をシンポジオン倉庫へ移動。
10月12日　山口室員と堀田室員が全国大学史資料協議会総会・全国研究会に出席（～14日、於広島大学）、堀田室員が「大学アーカイブズにおける個人文書の諸問題―名古屋大学の例を中心に―」を報告（12日）。
10月25日　愛知医科大学から資料室の視察・調査のため来室。
経済学研究科附属国際経済政策研究センターへ資料を移管、および同センターから資料を受贈。
11月１日　豊田講堂地階倉庫にあった本部非現用法人文書の評価選別作業開始。
受け入れ資料のデータ入力方式を、新検索システムに合わせて変更。
11月６日　豊田講堂改修のため、田村模型を豊田講堂から博物館へ移動。
11月10日　岐阜大学中尾氏、資料室の資料検索システムについての調査のため来室。
11月13日　生命農学研究科より、写真資料を一時受託。
11月14日　凸版印刷来室、共催セミナーの実施につき会談。
11月15日　愛知医学校記念碑 WG 立ち上げ。
11月20日　山本千秋名誉教授より資料受贈。
11月21日　中浜虎一名誉教授（故人）関係資料を受贈。
12月18日　国文学研究資料館アーカイブズ研究系高橋実教授が「情報公開と文書資料」で講義。
12月20日　高橋昭名誉教授より資料受贈。
12月23日　山口室員と堀田室員が科研費研究会に共同研究者として出席、堀田室員が研究会にて「大学アーカイブズにおける組織刊行物資料（大学資料）と法人文書の評価選別」を報告（於神戸大学）。
１月17日　山口室員が豊田講堂改修工事担当者と改修工事記録の保存について面談。
パートタイム勤務職員の公募要項を名大 HP に告示。
１月25日　全学的運用定員に関するヒアリング（佐分理事・大峯理事、於資料室）。
１月29日　キタン会事務所を訪問、所蔵資料の処遇について打合せ。

○第２回ホームカミングデイで「豊田講堂のあゆみ　特別展」をおこないました

大学文書資料室では、昨年９月30日に実施された第２回ホームカミングデイのメイン会場豊田講堂にて、「豊田講堂のあゆみ　特別展」と「名古屋大学のあゆみ展―キャンパスの変遷―」の２つ企画展示をおこないました。

「豊田講堂のあゆみ　特別展」は、豊田講堂２階第１会議室を展示会場として、施設管理部との共催でおこなわれました。今回のホームカミングデイが、全面改修前の豊田講堂でおこなわれる最後のビッグイベントであることをうけて、豊田講堂があゆんできた1960年（昭和35）年の建設以来の歴史と現在、そして改修後の未来を、模型やパネル、ポスター、物品展示、DVD 短編ムービーなど、さまざまな趣向でお見せしようというものです。全面改修後も基本的デザインを維持しつつリニューアルし、これからも名大のシンボルでありつづけるであろう豊田講堂へ関心は高く、多くの入場者に大変好評を博しました。

なお、展示にあたっては、竹中工務店（45年前の建設工事、そして今回の改修工事を担当）から改修後の豊田講堂模型、施設管理部からも改修の趣旨を解説するポスターなど、学内外のご協力を得ました。また、昨年度12回にわたって本誌の表紙をかざった、四季折々の豊田講堂の写真をパネル化したものも展示しました。

「名古屋大学のあゆみ展」は、前身諸学校の時代から、キャンパスが名古屋市内外に分散し、「たこ足大学」と呼ばれた名古屋大学が、やがて現在の３つのキャンパスにまとまるまでを、12枚のポスターや３体のキャンパス模型によって展示したものです。名大史の基本展示として毎年評判がよく、今回もホームカミングデイ実行委員会の要望をうけてのアンコール展示となりました。

「豊田講堂のあゆみ　特別展」展示会場の様子

展示を観覧する平野総長と豊田章一郎全学同窓会会長

名古屋大学大学文書資料室ニュース 第22号
Nagoya University Archives News No. 22

名古屋大学大学文書資料室
室　　長　羽　賀　祥　二（教授・併任）
専任室員　山　口　拓　史
　　堀　田　慎一郎
専門職員　坪　井　直　志
　　小田嶋　　徹
事 務 員　増　田　よしみ

発行日　2007年3月31日（年2回刊）
編　集
発　行　名古屋大学大学文書資料室
名古屋市千種区不老町〒464-8601
電話：（052）789-2046
FAX：（052）788-6222
E-mail: nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp
印　刷　株式会社荒川印刷
名古屋市中区千代田2-16-38